

Georg Büchner の *Woyzeck* について

(II)

——疎外とニヒリズムを中心に——

浜 本 隆 志

IV. *Woyzeck* における疎外について

人間が自己自身や他者、環境等のかかわりあいにおいて、人間性を喪失し疎遠な状態になること——すなわち疎外は、大別すれば社会的・経済的視点と、実存的視点から検討することができよう。まず社会的・経済的な疎外を考察したのは、資本主義の発展の中にプロレタリアートの人間性喪失を見た Marx である。周知のように彼は、Hegel の精神現象学の中心概念であった疎外を批判的に継承して、「経済学哲学草稿」のなかで、労働における疎外が人間から自然や自己自身、そして精神の本質や人間の本質を疎外し、類的本質 (Gattungswesen) をも疎外するとしている¹。むしろ産業革命や急速な資本主義の発展を知らなかった Büchner にあっては、労働という視点はなく、まして疎外された労働などは社会科学的に定式化されていない。したがって Büchner 論で私がこれから述べる社会的・経済的な疎外は、Marx 的な厳密な意味での労働における疎外ということではなく、社会的・経済的な諸関係によって、人間が人間性を喪失した状態という意味である。では *Woyzeck* のなかで、この疎外がいかに表現されているかを辿ってみよう。

「WOYZECK：自分たち貧乏人はつまり大尉殿、金、金なんであります。

金のないもんに、子供だけ道徳的にこしらえろって言われても。貧乏人にも血や肉があるんですよ。わしらみたいなもんは、どっちみ

ちこの世でもあの世でも救われっこありません。もし天国へゆけたとしても、雷さんの下働きがいいところで。

HAUPTMANN: Woyzeck よ。貴様は徳をもっとらんぞ。貴様は徳をつんだ人間じゃないぞ、血と肉だって？……そりゃあわしも血と肉をもっとるさ。だがな Woyzeck よ、徳だ徳なんだ。……

WOYZECK: そうです大尉殿。自分はその徳をもちあわせておらんのです。いいですか、わしらみたいな下司野郎にゃ、道德なんかありません。ただ自然とそういう風になるんで。でも自分が旦那のように、帽子や時計や鼻眼鏡をかけたり、お高くとまったしゃべり方をするんなら、そりゃあ徳のある人間になろうとしますよ。徳というもんは素晴らしいもんでしょうな大尉殿。でも自分は貧乏たれなんで。

HAUPTMANN: もうよい Woyzeck. 貴様はいい人間だ、いい人間だ。」²

フランス革命の自由主義思想の洗礼を受けていた Büchner は、手紙のなかで「貧富の関係がこの世の唯一の革命的要素です。飢えだけが自由の女神になりうるのです」³ と述べているが、彼はこの経済的な諸関係が疎外の根本原因であることを洞察し、これを *Woyzeck* のなかに形象化していると言えよう。大尉と Woyzeck との対話を通じて、社会的 Hierarchie の視点から階級的な矛盾を浮彫にした Büchner は、彼の世界観を Woyzeck に仮託し、赤裸々に吐露している。貧民である Woyzeck は、貧乏ゆえの苦痛・みじめさ・重圧感・嘲笑への反発という具体的な意識を持ちあわせているが、堪え忍ぶことしか知らぬ彼は、金持や大尉にも反抗せず、まして憎悪の感情などを持ってはいない。貧乏の理由や疎外の原因も知らず、天が与えた宿命として甘受している Woyzeck の姿こそ、1830年代のドイツの無知で無気力な兵士や農民の典型であろう。この当時のドイツの状況を根底的に省察し、変革への道を呈示したのが Marx の *Zur*

Kritik der Hegelischen Rechtsphilosophie である。が、Büchner は公式的マルクス主義や社会主義リアリズムの作家達のように、階級闘争の観点から *Woyzeck* を描写していない。主人公 *Woyzeck* に安易な救済の道を与えぬ Büchner は、彼を泥沼のなかにつきおとし、冷たくつきはなして徹底的に人間実存のぎりぎりの苦悶を、われわれの前にあばき出す。ここに「青年ドイツ派」から訣別し、ドイツ解放運動に挫折した Büchner の憂愁と心の痛みが感取されるのである。しかし逆に弁証法的に考えるならば、*Woyzeck* に代表されるみじめな状況や深淵をえぐり出すことこそ、Büchner の変革への指向のあらわれであり、彼のヒューマニズムにもとづく社会告発ではなからうか？ T.W. Adorno の見解を援用すると、純粹に昇華され、創作された芸術作品は、「作品が抑制している実践を指示し」⁴、„Es soll anders sein“⁴ が隠されているのである。したがって「自律性をもつ作品を強調することが、それ自体社会的・政治的意義を持つ」⁴ と言えよう。この意味において、階級闘争の視点にたっていない *Woyzeck* には、ドイツの惨状の奥底をきわめることによって、弁証法的に社会にアンガジュエしようとした Büchner の変革の情熱が混沌と渦巻いているのである。

さて、前述の大尉と *Woyzeck* との対話における道德の問題も看過することはできぬ。「社会環境の相違は、風習や道德観の相違を規定する」⁵ と H. Mayer が言うように、現実の経済的な諸関係が、宗教・哲学・道德等の意識を規定するのである。道德を金科玉条とする大尉は、これに否定的な *Woyzeck* を非難するが、社会から疎外され金のことしか眼中にない彼にとって、現実の苦痛や空腹の解決策にならぬ道德は、何の価値もないものである。したがって大尉と *Woyzeck* の道德観の相違は、おかれた環境のちがいに起因しており、二人の対話は相互に了解することが不可能である。大尉は「貴様はいい人間だ」と言って、*Woyzeck* に安っぽい同情をよせるが、道德や「いい人間だ」という言葉は、*Woyzeck* が現実に対峙

している疎外を隠蔽する欺瞞と虚飾にみちた美辞麗句にすぎないのである。

ひきつづき、Woyzeck と医者との対話より引用してみよう。

「DOKTOR：わしは見ていたぞ Woyzeck。貴様、通りで小便しただろう。犬のように壁に小便したな。／＼ だが、わしは貴様に毎日三グロッシェン払っとる。……」

WOYZECK：だけでも先生、自然にそうなるときには――。

DOKTOR：自然にそうなる？ 自然にか。／＼ 自然だと。／＼ わしや証明しただろう？ 膀胱括約筋が随意に働くことを。自然だと。／＼

Woyzeck, 人間は自由なもんじゃ。人間において個別性は浄化され自由になる。尿をこらえられないなんて。／＼……いつも豌豆を食べたろうな……

中 略

WOYZECK：先生、つまり自然が二重になるのを知っていますか？

太陽が南の空にじっとしていて、世界中が焔につつまれたようになった時、おそろしい声が耳に聞こえてきたんです。……

DOKTOR：Woyzeck よ、貴様は きわめて 見事な 局部性精神錯乱じゃ、第二期症状がじつに見事に出土するわい。Woyzeck, 謝礼を増してやるぞ。」⁶

給料だけでは生活してゆけぬ Woyzek は、医者の実験材料となって金を捻出するが、彼は意志の力によって小便もコントロールせよという医者の指示に従うことができない。狂おしいまでに実験に熱中し、Woyzeck をまるでモルモットのように眺める医者は、もちろん教養階級のカリカチュアとしてシニカルに表現されている。この医者の言う「自由」とは、Woyzeck にとって貧困になる自由という意味しか持たぬ空虚な言葉にすぎない。拡大解釈をすれば、本来の人間であることから疎外された貧民である Woyzeck は、ブルジョワ的な自由の欲求充足による犠牲者であると考えられる。当然のことながら、Woyzeck の言う自然の生理現象を我慢


することができないのが、生身の人間の姿であって、内妻 Marie が Woyzeck を裏切り、姦通するのも本能的な自然の性欲が原因なのである。

もはや モルモット化された Woyzeck は、魂を蝕まれ、精神を引き裂かれ、Marionette のように物質化される。いわば Büchner は精神錯乱の比喻を使って、人間疎外の悲惨さを、彼の底にある自然科学者の醒めきった目で直視したのであった。しかも医者と Woyzeck の対話から理解されるように、Büchner は痛ましい非人間化の悲劇を、彼固有のリアリズムの手法でアイロニカルに表現することによって、かえって悲劇を強調することに成功している。この逆説的な手法により、Woyzeck には豊饒な文学的生命性と、作品のかもしれない内的緊張が生じるのである。

非人間的な医者の人体実験材料になるばかりではなく、大尉の髭そりのアルバイト までして金を稼がねばならぬ Woyzeck は「日のあるうちはあくせく働かされて、おまけに寝てまで汗をかくんだな、おれたち貧乏人は。」⁷ と苦しい心情を吐露する。このような貧民の悲惨な現実には、Büchner の言う「われわれの外部にある環境の問題」⁸ に帰着すると言えよう。環境と人間存在の両次元に介在する相互関係が、ある一面 Woyzeck の存在を規定するのである。Büchner は手紙の中でこう言う。「政治をみていると気が狂いそうになってくる。かわいそうに大衆は歯をくいしばって重い荷車をひっぱり、王侯や自由主義者たちはその上で猿芝居をやっているんだ。」⁸ ここで常に大衆の立場にたって環境という現実社会を変革すべく、政治運動に参加した Büchner の側面と、Woyzeck が有機的に関連しているのがわかるのである。

冒頭に述べたように、Woyzeck における経済的・社会的な疎外の考察にひきつづき、視点を変えて実存的な疎外を検討してみよう。人間存在そのものを重視し、実存主義的な立場をとる Kierkegaard は、自己疎外とは自己が神を見失い、神と自己との はてしない断絶を意味するとし、彼はこの疎外を「不安」・「絶望」・「水平化」として深く分析している。また

Heidegger は「頽落する世界一内一存在は、誘惑的であるとともに、疎外的である」⁹ と述べているが、彼にしたがえば、疎外は人間の本来の存在（実存）から、日常的な現存在（ひと）の中に頽落し、存在忘却の状態におち入ることを意味する。このような実存主義的な視点からみると、不安・絶望・不条理・狂気・グロテスクなどは、本来の人間存在から「頽落」した意味における疎外された状態と言ってよからう。

では Büchner の作品に即して、実存的疎外の一形態とも言うべき狂気やグロテスクなものを考察してみよう。Woyzeck は「おれのあとから、町の入口までついてきやがった。何かおれたちにはつかめない、得体の知れない、おれ達を狂わせるようなものだ。」¹⁰ と恐怖におののく。また大尉は「グロテスクだ、グロテスクだ、」¹¹ と述べるし、その他「生首がころがっている」「赤い月」¹²「血のりのついた刃物」¹² など、凄惨で陰湿なイメージを与える表現が、いたるところでみられ、これが作品の主要なモチーフを形成していると言えよう。Woyzeck のみならず、Lenz でも精神錯乱の狂気が克明に表現されている。

Büchner の作品にみられる戦慄的な怪奇性やグロテスクさから、F. Gundolf は Büchner を後期ロマン派につながる劇作家であるとし、彼は George サークル固有の審美的な側面から、Büchner の作品を ästhetisch に解釈している¹³。この見解の独創性と文学的な直感力の鋭さや、美的感覚性は高く評価しなければならぬが、反面、この立場は「Woyzeck にあっては社会階層も雰囲気である」¹⁴ と Gundolf が言うように、作品の社会性をも雰囲気に解消し、かつムード的なものにすりかえてしまう点に限界があると言えよう。この点に関して、H. Mayer の次の反論が要を得ている。

「Büchner の全著作をより詳しく研究すればする程、Gundolf の Büchner 解釈、すなわち Büchner の文学作品を他のあらゆる活動性から、はっきり切り離すべく努めている解釈は、論拠のないものとなる。

…… Büchner 文学は社会体験から発するものであり、体験し暗示された現実を描写しているのである。」¹⁵

さて Büchner の作品における狂気やグロテスクなどは、一般に醜悪なものや ekelhaft なものとして、ネガティブにかつ退廃的なものと考えられる。ところがこれらの醜い疎外されたものは、いわゆる健全な市民社会に対する芸術の立場からの反抗であり、痛撃であろう。古典主義は健全でありロマン主義は病的であると言った Goethe でさえも、Eckermann との対話の中で次のように述べている。

「人々は気高い意向や行為の表現を退屈だと公言し始め、あらゆる種類の残忍非道を取扱って見ようとしている。ギリシャ神話の美しい内容に代って、悪魔や魔女や吸血鬼が登場し、前代の崇高な英雄は詐欺師やガレー船の奴隷に席を譲らねばならない。……私が述べた極端と突飛とは漸次消え失せるであろう。しかし最後には、一層自由な形式と共にまた一層豊富な一層多様な内容が獲得され、広大極まる世界や複雑極まる人生の如何なる対象も最早詩的でないとして排除されることがないという実に大きな利益が残るだろう。」¹⁶（小口 優訳）

このように Goethe は、健全なものから逸脱した魔的なもの、グロテスクなものに否定的な見解であったにもかかわらず、そのもつ芸術的に豊饒なエネルギーや、芸術領域における動脈硬化をうちやぶる生産的側面を見ぬいている。Goethe における意味からも、Büchner が好んで文学作品に描写する、精神病患者、狂人、貧民、売春婦、性病やみ、白痴などのイメージは、ネガティブな社会の深層部よりどろどろと噴き出してくる病的側面であるが、これがかえって従来の文学空間を破壊し、斬新な創造を生むエネルギーとなることが理解されるであろう。資本主義社会の発達や近代自然科学の発明などによって、社会が繁栄してゆく一方、その底辺で人間が人間らしさをますます奪われている状況のなかでは、この現実社会を古典的な美意識で表現することは、もはや不可能となった。このような

意味から、現実を直視した Büchner 固有の新しい美意識が理解できるのである。20世紀文学——たとえば G. Heym の『戦争』、G.Benn の『屍体公示所』、Rilke の『マルテの手記』、Hesse の『荒野の狼』、Sartre の『嘔吐』、Camus の『ペスト』など、今日市民権をもっているこれらの作品が、古典的な美意識と異った視点で、疎外・絶望・不安・狂気・グロテスクなどを執拗に追求しているのも、病める現代の背景を表現しているのである。

ひきつづき *Woyzeck* に即して、絶望や深淵の意識を考察してみよう。大尉から内妻 Marie が姦通したことを知らされた Woyzeck は、こういう。

「WOYZECK：大尉殿、この世は焦熱地獄と言いますが、自分には氷のように冷たいのであります。地獄は冷たいのです。絶対に。ありえないことだ、畜生！ くそっ！ ありえないことだ。——中略——大尉殿、見て下さい。あの通りきれいな動かない灰色の空に、丸太ん棒をどまん中におちこんで、首をくくりたいような気持ちになりますよ。それというのもただ、そうだ、やっぱり、——いやそうじゃないと考えあぐむからなんですよ。」¹⁷

大尉や医者から愚弄され、精神錯乱に悩まされている Woyzeck にとって、生の意志を支えていた唯一無二なものであった Marie、その姦通の噂は、彼の生きる意味を根底から覆えすものであった。彼は気も動転し、混乱しその噂を否定しようとする。が、否定は肯定に転化し、彼の頭の中でぐるぐるまわり、不安・混沌は絶望へ深化される。生活のすべてが崩壊してしまった彼は「人間というものはみんな深淵だなあ、のぞきこんだら目まいがすらあ」¹⁸ と述べる。この Woyzeck の嘆息の言葉は、人間存在の不気味な魔性の本質をついたものであり、Büchner は Woyzeck に仮託して、人間存在の見極めがたい出口なしの深淵を表現したのである。またこの深淵は、Büchner の言う「人間の外にある状況」¹⁹ に組込まれ、

従属されねばならない宿命的な人間の悲劇の具体的な表現でもあろう。Camus は『シジフォスの神話』のなかで、この深淵による断絶を「不条理」と規定している²⁰ が、この現代的な危機意識に通ずる人間存在の深淵の意識は、Büchner の現実の社会体験から発するものであり、ここにも詩人の生への深い洞察が感取されるのである。

最愛の Marie に裏切られた Woyzeck の絶望と孤独は、次に引用する Märchen のなかに具現されている。

「むかしむかし、それはかわいそうな子供がいたんだよ。お父っつあんも、お母っさんもいなくてね、みんな死んでいたんだよ。この世には誰もいなかったのさ。だからその子は出かけて行って、夜も昼もさがしたのさ。だがね、この世には誰もいなかったんで、その子は天にのぼろうと思ったんだよ。するとお月様がやさしく照して下さった。やっとその子がお月様のところまで来てみるとね、それは腐った木片だったのさ。その子がお日様のところへ来てみるとね、それは枯れた日まわりだったのさ。こんどはお星様のところへ来てみたら、それは小さな金色の油虫だったのさ……仕方がないので地上に帰ってみるとね、それはひっくりかえった壺だったのさ。だからその子は本当に一人ぼっちになって、そこに坐って泣いていたんだよ。いつまでもその子はそこに坐って、本当に一人ぼっちでいるんだとさ。」²¹

孤独から脱出しようとする孤児の試みは、すべて徒労に終り、希望は幻想にすぎない。「異邦人」として世界を漂泊し彷徨する子供の姿は、みじめな放浪を重ねた史実の Woyzeck を連想させる。この Märchen にくりひろげられているのは、Viëtor にしたがって言うならば、「存在の無意味さ、幻滅、失望の神話」²² である。この世界から疎外された「限界状況」は、人間の条件としての「不条理」や、孤独から脱出できない人間の運命とも考えられる。

この Märchen でも、希望と絶望の両極を対置させ、効果的に絶望状況

を強調する Büchner の手法は、冴えわたっていると言える。たとえば月と腐った木片、太陽と枯れた日まわり、星と油虫、地上とひっくりかえった壺などの対比がそれである。が、それのみではなく、この場 (21場) に挿入されている Märchen は、大局的な視点からみると、この場の最初の Volkslied と対になっていることが理解されよう。因にその Volkslied を引用すると、次のようである。

„Wie scheint die Sonn am Lichtmeßtag
Und steht das Korn im Blühn.
Sie gingen wohl die Wiese hin,
Sie gingen zu zwein und zwein.
Die Pfeifer gingen voran,....“²³

お彼岸には燦々と日が照って、
麦は花つける。
みんなそろって野原へゆくの、
ふたりならんで手に手をとって。
笛吹きたちは先にゆく、……

この楽しくて明るい春の光景の後に、一転して前述の荒涼とした孤独の Märchen が続くのである。このような Büchner 特有の手法によって、孤児の孤独や失望がきわだって浮彫にされ、同時に *Woyzeck* 劇全体の悲劇性が、強烈な迫力をともなってクローズアップされるのである。

上述のように *Woyzeck* における狂気・グロテスク・深淵・孤独などの実存主義的な疎外形態と名づけた一連のネガティブな側面は、確かに作品の重要なモチーフであり、基調である。が、根底においては実存主義的な Büchner 解釈は、Lukács の指摘にもあるように、「出口なしの暗黒の虚偽の深みへ、慢性的な絶望の世界へ、Heidegger の „nichtendes Nichts“ の世界へ導きこむ」²⁴ 点に限界があると言えよう。Büchner 文学研究は社会的・歴史的な見地から有機的に行なうべきであって、*Woyzeck*

の「絶望の抽象的な永遠化・非歴史化・非社会化」²⁵ はその真の姿を歪曲するものである。

今までみてきたように、社会的疎外と実存的疎外の視点から、*Woyzeck* を考察してきたが、これらの疎外の文学的な形象化として、Büchner は Marionette というモチーフを用いている。たとえば *Der Hessische Landbote* では、「実直な男が大臣になり、その職にとどまったとしても、君主という人形に操られる Marionette にすぎない」²⁶ と述べられており、*Dantons Tod* でもこう表現されている。

「あるやつは人形をこしらえる。その人形が糸で吊り下げられ、糸をひかれて五脚のヤンプスを奏でて、一步進むごとに関節をカタカタいわずのを見せられるわけだ。性格も筋もあったもんじゃないよ。僕らはみんな操り人形さ、見も知らぬ力で操られているんだ。」²⁷

Woyzeck でも主人公は幻覚や幻聴によって、目に見えぬ力で操られるように、殺人へと駆りたてられる。このように登場人物を人形になぞらえ、世界を人形劇とする Büchner の視点から、彼の諧謔的な皮肉があらわれ、機械や装置と化した世界への警鐘が生れる。非人間的なもの・人工的なもの・不気味なもののイメージをわれわれに与える人形は、Büchner の場合には、主体性を失なって非人間的に疎外されたものの文学的な具体性にはかならない。Jens も劇作家 Büchner が人形のイメージを使って、「社会条件によって生じた疎外現象を……極端に図式的に」²⁸ 描いたと述べているが、Büchner はこの人形のイメージでドイツの惨状、すなわち当時のドイツの支配階級の意のままに操られている貧民の姿を象徴的に、かつシニカルに表現したのである。

V. *Woyzeck* におけるニヒリズムについて

人生や世界全体をニヒルであり、虚無であるとするニヒリズムは、元来

Nietzsche や Dostojewskij らによってヨーロッパの19世紀末の世紀病として予言された思想であるが、Büchner の場合にも彼の思想的背景には、ニヒリズムの傾向が色濃く影をおとしているように思われる。では最初に、社会的に活動した Büchner が、ニヒリズムをいかに体験したかを見てみよう。1830年から1848年に至るヨーロッパの革命運動の過渡期に青春を送った Büchner は、政治的にも思想的にも新しい境地にたち、尖鋭化され研ぎ澄まされた洞察で、「貧民」である大衆が革命の主体であることを見ぬいた。彼は Gutzkow に「新しい精神生活の形成を大衆の中に求めねばなりません。そして腐った現代社会を破壊させるべきです。」²⁹ と述べている。しかし反面、Straßburg 留学によって Büchner は、ドイツの後進性を客観的にかつ冷静に観察していた。友人、A. Becker の陳述にしたがえば、Büchner は「ドイツの民衆がどの程度まで革命に参加する気であるのかを確認」³⁰ するために、実践活動に身を投じたのであった。彼は同志とともに「人権協会」を設立し、農民たちの自覚を促すために、*Der Hessische Landbote* を秘密印刷し、彼らに配布した。だが、結果ははじめなものであった。当時のドイツでは、貧しい大衆の胸の中に秘めたる不満ややりきれなさを、組織化することは不可能であった。*Der Hessische Landbote* の冒頭で、官憲に対する注意を促さねばならなかったほど、長年にわたる当局の弾圧は厳しく、貧民はがんじがらめの枠の中に閉じこめられ、それと同時に保守的なドイツの俗物性の風潮とが相まって、ドイツには革命的な雰囲気や状況は成熟していなかったのである。Büchner は弟にあてた手紙の中で、実践活動の挫折感を次のように述べている。

「僕は君にいま政治的変革の可能性が信じられるとは、口がさけても言うまい。ここ半年ばかり前から、いま何もすべきでない、いま行動に身を投ずるのは気違い沙汰で、むざむざ命をすてるようなものだと思っている。」³¹

ドイツの惨状や時代の閉塞状況に起因する挫折感や絶望感は、社会的には畢竟、貧民が Marx の言う³² 真の意味におけるプロレタリア階級でなかったところに発すると言えよう。ラディカルな Büchner が突きあたった壁とも言うべきドイツの惨状と、プロレタリアートの自己疎外を普遍化し、解決の道を見出したのが、弁証法的唯物論であった。Lukács にしたがって言うならば、³³ Büchner は 機械論的唯物論から 弁証法的唯物論に至る過渡期の混沌の渦巻く時代に生きた悲劇の革命家であった。揺れ動く青春時代特有の模索を重ねながら、Büchner は「フランス革命」を研究して、婚約者に次のように書き送っている。

「僕は歴史の宿命の怖ろしさに打ちのめされたような気持であった。人間の本性のうちに怖ろしい一様無差別が見えてくるし、人間のおかれた状態には、どうにも逃げられない圧力が万人に加えられ……ひとりひとりの人間は波間に浮かぶおぼくにつきず、大立物もほんの偶然の産物だし、天才が統治すると言っても操り人形で、鉄の法則に対して滑稽千萬な悪あがきをしているだけである。」³⁴

Büchner は Hegel 弁証法を軽視したために、ニヒリズムに通ずるとも言うべきこの宿命論におち入ったと言えよう。（たとえば彼の Hegel 哲学に対する態度について、学生時代の友人である R. Luck が次のようにのべている。「Hegel 弁証法と概念形成の奇術…… に対して、Büchner は否定的でたびたび不遜な嘲笑をあびせていた。」³⁵）以上述べた挫折感・絶望感・宿命論などは、変革と懐疑の葛藤の中で深刻に体験された彼のニヒリスティックな負の側面であり、彼はこの相剋を解決する前に夭折したのであった。

では作品に即して Woyzeck を中心にニヒリズムの問題を考察してみよう。Woyzeck は地面をさして「下の方は みんな 空っぽだ」³⁶ と言うが、この大地の空洞化の意識は、今まで拠り所としていた確固たる基盤——疑いもせず絶対化していた神や人間存在——が崩壊する時に感じる無

の意識であると考えられる。Danton も「僕らはみんな操り人形さ、見知らぬ力で操られているんだ。僕ら自身は無だ、無なんだ。」³⁷ と述べる。Sartre 流に言えば、存在と意識とのさけ目としてのこの無は、パラドキシカルな意味における生の追求であり、Büchner の人間存在への深い洞察のあらわれであろう。さらに Büchner は職人に仮託してこういう。

「なぜ人間が存在するのか？もし神が人間を創造されなければ、百姓も桶屋も靴屋も医者も、どうして生きりゃいいんだ。神が人殺しの欲望を備えさせなけりゃ、兵隊は何によって生きりゃいいんだ。……この世はできそこないなんだ。金すらも腐ってゆかあ。最後にみなさん、さあ十字架に小便をしようじゃないか、キリストが死ぬように。」³⁸

キリスト教徒にとって、聖なる権化である十字架に小便するという神に対する侮蔑は、Büchner の無神論の世界観にその根を持つものである。Dantons Tod の中でも Peyn は、「神が世界を創造したなんてことはありえない。神は存在しえない。」³⁹と述べる。このように今まで絶対的存在と考えられていた神が存在しないことによって、ニヒリズムが露呈するのである。職人が述べる世界も、人間存在の無意味さ、むなしさであり、神による救済も不可能なニヒリズムの境地である。これは同時に、不貞の罪を神にすがってあがなおうとして、「ああ、何もかも死んでしまった。救世主よ、どうか私にも御足に香油をぬらして下さい。」⁴⁰ と祈った Marie を Woyzeck が殺害する状況設定とも、表裏一体をなしていると言えよう。無神論者である Büchner は作品の登場人物に仮託して、神の虚像を鋭くあばき、神の死やニヒリズムの問題を、Nietzsche より半世紀も前に提起しているのである。この点に関して Viëtor も、形而上学的な解釈の視点から次のように述べている。

「深淵から立ちのぼることも、人生の新しい道の意義をも試みることもできない、人間による根源的なニヒリズムが、Nietzsche よりもずっと以前に、ここに表現されている。」⁴¹

ここで Büchner との関連をみる意味から、Nietzsche のニヒリズムがどのようなものであったか、きわめて簡単に概観してみたい。周知のように、Nietzsche のニヒリズムには第一段階として、「生の否定」や「絶望」の徹底化のプロセスがあり、これが肯定的ニヒリズムの出発点とも言うべきものである。彼はこの否定的側面を肯定的側面に展開することにより、ニヒリズムに「leidenschaftlich な対決」⁴² をせまる。そして Nietzsche のニヒリズムは、「観想の立場からパトス的な実存の立場への移行」⁴² を試みることによって、新しい価値創造を生みだしているのである。この視点より「超人」・「永却回帰」・「権力意志」の基本思想があらわれ、ニヒリズムの克服の道が開けるのである。

論旨をもどして、Büchner と Nietzsche のニヒリズムを比較してみると、彼のそれは Nietzsche のように克服や超越の指向を定式化していない。したがって Büchner のニヒリズムは、Nietzsche の初期の段階である「ニヒリズムの意識」の次元にとどまっているところに、時代的な限界があり、Nietzsche のヴァイタリズム、つまり力動的な生の肯定との相違があるといえよう。しかし *Woyzeck* や *Dantons Tod* に表現されているようなニヒリズムの意識化こそ、その克服の出発点であると考えられる。この視点からみると、神がいなければすべてが許されるという Dostojewskij 風の暗黒の虚無の深淵がひろがる *Woyzeck* のニヒリズムも、その克服を透徹した状況描写の側面から見いだすことができるであろう。Sartre の見解を援用する⁴³ と、状況を徹底的に把握し、全体的に省察し提示することによって、「状況超越」の可能性が生じるのである。これが作品の文学的意味作用と言うべきものである。

今まで考察してきたニヒリズムは、Büchner 文学の重要な側面ではあるが、この面を強調するあまり、Büchner を絶望した作家であると結論づけるのは、彼の本質を曲解することになるだろう。と言うのも、Büchner の挫折は機械論的な無神論の帰結であって、Lukács も言うようにあくま

で「Büchner の本質的な特性はあらゆる搾取と抑圧に対するはげしい革命的な憎悪にある」⁴⁴ からである。したがって Büchner 文学におけるニヒリスティックな絶望は、歴史的な意味での当時のドイツの惨状に対する彼のディレンマや焦燥・憤りのあらわれにほかならぬ。Marx も *Zur Kritik der Hegelischen Rechtsphilosophie* の中でこう言っている。

「惨めなものをすべてを温存することにより生きながらえ、それ自体支配の惨めさにはほかならぬ支配体制のその枠に閉じこめられている、すべての社会階層の相互の重苦しい圧迫や、すべての怠惰な憂鬱や……偏狭さを描写することが必要なのである。」⁴⁵

このようにドイツの惨状を意識化し、徹底的に描写することによって生み出される文学空間の世界に、その克服のモメントが見出されると考えられる。この意味からも、絶望の詩人 Büchner の背後には、混沌とした変革の情熱がうずまいており、ニヒリズムに潜沈してしまう実存主義的な Büchner 解釈は、究極的なところでは否定されるべきものである。

Büchner がわが国においても新しく翻訳され、またドイツでも現代作家たち (H.M. Enzensberger, H. Böll, H.E. Nossack, W. Jens u.s.w.⁴⁶) が Büchner 論を起草しているのを想起するとき、Büchner のもつアクチュアルな意味が、極めて大きいと言わねばならぬ。拙論〔I〕〔II〕の考察からも理解されるように、Büchner 文学は重層的であり簡潔な、政治的であり非政治的な、論理的であり不条理な、正常であり異常な、人間存在そのもののように多くの側面をもっている。が、首尾一貫して変らなかったのは、疎外された貧民への彼のあくなき同情と、ドイツの惨状に対する彼の憤激であった。したがって時代的限界により、決定論的な宿命論に閉じこめられていた Büchner ではあったが、彼の作品には根底において、ニヒリズムや絶望を突き破る力強い生命力が胎動しているのである。政治にアンガジュエし挫折した体験からなる彼の文学作品を考察すれ

ばする程、アクチュアルな課題である文学の「アンガージュマン」と「自律」の問題が解明されるであろう。

(追記。本稿は『独逸文学』18号の続編である。)

Text Georg Büchner : *Werke und Briefe*. Deutscher Taschenbuch Verlag.
Hrsg. von Fritz Bergemann, München 1967. 訳文については、手塚富雄、
千田是也、岩淵達治監修の『ゲオルク・ビューヒナー全集』河出書房、1970年
を参照または使用させていただいた。

注

1. vgl. K. Marx : *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, Leipzig 1970, S.159f.
2. Text, S.114.
3. Text, S.179.
4. T.W. Adorno : *Noten zur Literatur* III, Frankfurt 1965. S.134.
5. H. Mayer : *Georg Büchner, Woyzeck*, West-Berlin 1970, S.64.
6. Text, S.119f.
7. Text, S.119f.
8. Text, S.164.
9. M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 1958, S.178.
10. Text, S.116.
11. Text, S.123.
12. Text, S.130.
13. vgl. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, Darmstadt 1965, S.90ff.
14. ibid. S.94.
15. H. Mayer : *Georg Büchner und seine Zeit*, Berlin 1960, S.407.
16. J.P. Eckermann : *Gespräche mit Goethe*, Heidelberg 1959, S.549f.
17. Text, S.122.
18. Text, S.123.
19. Text, S.164.
20. A. カミュ『シジフォスの神話』矢内原伊作訳、新潮文庫、1967年、26ページ以下参照。
21. Text, S.130.
22. *Georg Büchner* Hrsg. von W. Martens, a.a.O., S.171.
23. Text, S.129.
24. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, a.a.O., S.212.

25. ibid. S. 224.
26. Text, S. 136.
27. Text, S. 30.
28. 『ゲオルク・ビューヒナー全集』前掲書, 537ページ.
29. Text, S. 191.
30. Text, S. 307.
31. Text, S. 179.
32. vgl. K. Marx : *Zur Kritik der Hegelischen Rechtsphilosophie*, Marx Engels Werke, Berlin 1958, I, Bd.
33. vgl. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, a.a.O., S. 121.
34. Text, S. 162.
35. Text, S. 303f.
36. Text, S. 115.
37. Text, S. 33.
38. Text, S. 125.
39. Text, S. 38.
40. Text, S. 128.
41. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, a.a.O., S. 176.
42. 西谷啓治『ニヒリズム』, 創文社, 昭和45年, 13ページ参照.
43. J.P. サルトル『知識人の擁護』佐藤朔・他訳, 人文書院, 1967年, 125ページ以下参照.
44. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, a.a.O., S. 221.
45. K. Marx : *Zur Kritik der Hegelischen Rechtsphilosophie*, a.a.O., S. 380.
46. たとえば H.M. Enzensberger の *Deutschland, Deutschland unter anderm*, H. Böll の *Georg Büchners Gegenwartigkeit*, H.E. Nossack の *So lebte er hin...*, W. Jens の *Schwermut und Revolte-Georg Büchner* などを参照されたい.

Über Georg Büchners *Woyzeck*

II

—besonders in bezug auf das Problem der
Entfremdung und des Nihilismus—

Takashi Hamamoto

In diesem Aufsatz habe ich das Problem der Entfremdung und des Nihilismus betrachtet, das in *Woyzeck* inhaltlich ein wichtiges Thema ist. Georg Büchner stellte scharfe Betrachtungen über die gesellschaftlich beschränkten Umstände der damaligen Zeit. Aus dieser Erfahrung entsteht sein letztes Drama *Woyzeck*, welches das Problem der gesellschaftlichen Entfremdung künstlerisch gestaltet. Der arme Held Woyzeck, der als Wurm von dem Hauptmann und dem Doktor grausam behandelt wird, ist der Typus des entfremdeten Menschen, mit dem Büchner, wie immer, das Mitleid gehabt hat. Hans Mayer hat auch sehr zutreffend Woyzeck als den „extremen Fall menschlicher Selbstentfremdung“ gekennzeichnet.

Es unterliegt aber keinem Zweifel, daß die sogenannte negative Seite wie Fatalismus, Nihilismus, Verzweiflung u.s.w. auf die Grundstimmung dieses Werks einwirkt. Woyzeck, der sich von Marie täuschen ließ, sagt vor Verzweiflung: „Jeder Mensch ist ein Abgrund; es schwindelt einem, wenn hinabsieht.“ Und der erste Handwerksbursch sagt: „Zum Beschluß, meine geliebten Zuhörer, laßt uns noch übers Kreuz pissen, damit ein Jud stirbt!“ Hier

behandelt Büchner das Problem des Abgrunds der menschlichen Existenz und des Todes von Gott, wie es im Nihilismus von Nietzsche oder Dostojewskij erscheint. Gerade in dem dialektischen Sinnzusammenhang dieser negativen Seite können wir vielleicht sein Pathos oder seinen vollen Einsatz für eine gesellschaftliche Umänderung herausfinden ; beides durchzieht als Anklage gegen die damalige gesellschaftliche Entfremdung oder als sein eigenes Engagement dieses Werk. Wenn wir Theodor W. Adorno eben in diesem „sublimiertesten Kunstwerk“ *Woyzeck* folgen, so birgt sich „Es soll anders sein.“ Je tiefer wir in Georg Büchners Werk eindringen, um so stärker spüren wir die aktuelle literarische Aufgabe des Engagements und der Autonomie.